

中国とフランスとの間には、多くの共通性がある。東西文明の中心、フランス語と中国語(北京語)の普遍性、中国料理とフランス料理の普遍性、毛沢東とドゴールに代表される強烈なナショナリズム等々。もう大分昔になるけれど、高校生の時にフランス語を学んでいた私たちは、文化祭の展示でフランスの国民性を解説する際に、「中華思想」と書いたことがあった。

そのフランスには、シノロジー(中国学)の永い伝統がある。早くにわが国で邦訳されたエドゥアール・シャヴァンヌの『司馬遷と史記』やアンリ・マスペロの『道教』、近くはレオン・ヴァンデルメールシュの『アジア文化圏の時代』といった本を一読すれば、その学問的水準の高さに圧倒される。

そうしたフランスの現代中国学界と学術交流を続けてきて、もうかれこれ四半世紀の歳月が過ぎた。それは、クロード・カダール氏とその妻チェン・インシアンさんと私の交流から次第に輪が広がったものである。

中国共産党創期の最高指導者の一人で「中国のトロツキー」とも言える彭述之の娘婿と妻娘でもあるこの個人的なカップルに私が最初に出会ったのは、フランス亡命中の彭述之の密かな来日を私が

文化



98年4月、仏モンパルナス墓地で行われた彭述之、陳碧蘭夫妻の遺灰埋葬式(右から3人目が筆者)

フランスの中国学 冷静・丹念・高水準

四半世紀の 日仏交流を 振り返って



なかじま みねお
中嶋 嶺雄

東京外国語大学学
長・国際関係論
1936年長野県生まれ。著書に「北京烈
烈」「香港回帰」「中
国・台湾・香港」な
ど。

お世話して二年後の一九七〇年夏、香港においてであった。当時、中国では文化大革命が盛り上がり、パリ「五月革命」の熱気がまだ続いていて、サルトルに代表されるフランスの知識人には、「毛沢東思想」に共鳴する人々が多かった。しかし、この二人は、そうした雰囲気から冷めていて、そのことはフランス中国学界の重鎮ルシ

アン・ピアンコ教授(社会科学高等学院)らとの共著『中国への冷静な眼』にも現れていた。カダール氏はやがて全フランス政治学財団国際関係研究調査センター(CER)の中国・極東部長となり、チェンさんも同主任研究員になったが、日本学術振興会の支援による最初の日仏セミナー「現代中国の政治と国際関係」がセーヌ河畔のCNRS(フランス国立中央科学研究院)で開かれたのは、一九八四年の暮れであった。セミナーの成果は、カダール氏と私の共編著『中国の戦略と龍の変身』としてフランス語で出版された。

このような交流は、やがて文部

現実に対し厳しい目

から先のカダール夫妻、ヴァンデルメールシュ名誉教授(パリ第五大学)、ピアンコ教授に加えて何人かの中堅研究者が加わり、今回の日本側参加者は、中兼和津次(東大教授)、小島朋之(慶大教授)の両氏を含む九名であった。会議では、英語を共通語として討論するのだが、回を重ねると、聴き取りにくいフランス訛りの英語にも慣れ、お互いの意見もわかってきて、激しい論争があっても学びあえる点が多い。

アメリカの研究動向が理論モデルに傾きがちである半面、とかく政策志向型で米中関係などに影響されやすく、中国に甘い見方が多いのたいしフランスの場合は、歴史実証主義が主流であるけれど、人権や民主など中国の現実についてはきわめて厳しい目を注いでいる。しかも底流にはフランス社会学の学問的な伝統が流れているように思われる。ピアンコ教授が、今日でも農村に存在する旧中国云々の「戒諷」(討客付)による武闘)を丹念に例示したことも印象深かった。

省重点領域研究「東アジア比較研究」(一九八七年、八九年)度へと受け継がれ、この大型プロジェクトにはフランスの研究者も何人か参加した。これらの学術交流をさらに引き継いだのは、一九九二年度から今日まで八年間にわたる同科学研究費国際学術研究であり、この間、日仏共同研究パリ会議が毎年開催された。去る一月二十八、二十九の両日、パリの社会科学高等学院で開かれた本年度のパリ会議では、「中国の国有企業改革」「中国都市部における中間層の形成」「返還後香港の法的变化」「米中関係と知的所有権」「当面の日中関係と台湾」などが熱心に討議された。

メンバーとしては、フランス側

歴史実証主義踏まえ

ともあれ私たちの日仏共同研究は、おそらく社会科学分野では唯一の日仏間の長期交流として今日まで続いている。モンパルナス墓地での彭述之・陳碧蘭夫妻の埋葬式には、私たちのメンバーが多数参加したりもした(本紙九八年四月二十一日夕刊)。しかし、いずれの物事にも終わりがある限り、やはりこのあたりで締めくくることがよいのではないかと私は考えていた。こうして今回が最後のパリ会議には、かつて共同研究のメンバーの一人であった小倉和夫駐仏大使夫妻も着任二日目だというのに会食会に出席された。私が終わりの挨拶と謝辞を述べた時、カダール夫妻の目が潤んでいたと聞いて、私の楽しい苦勞が報われた思いでもあった。